

ゲセル物語のモンゴル語書写版諸版の相互関係について

田 中 克 彦

一 はじめに

十七世紀以降のモンゴル語文献の主流をなすものは *Erdeniyin tobci* (漢訳名『蒙古源流』) が代表する年代記の一群であり、これらはチベット仏教史書からの刺戟によって成立し、一貫した継承性によって著しい共通の特色を担った年代記の伝統をかたちづくっている。これらの特色は、時間の軸に沿っていえば『元朝秘史』に結実した十三世紀の叙事詩的歴史記録の伝統と、深い断層によってへだてられており、共時的にはチベット仏教文化——したがって間接的にはインド文化——の直接の移植としての翻訳・編纂仏典類と同様、どちらかといえば、言語作品全体の中で閉じられた世界を作っていた。これら二類の言語作品は、特定の支配階級の管理すると

ころであり、書写の世界そのものが、この種の作品によって専ら独占されているかのようであった。このような文献的環境の中で、ゲセル物語はみずから巨大な例外となつて、モンゴルの言語文化史の上で特異な地位を占めることとなつた。ゲセル物語は上記の二類の作品とはちがつて、より民俗的要素を反映しえたし、またそのことによってこそ自らの存在意義を主張しえたのである。それにもかかわらず、他方、ゲセル物語は書写の世界に市民権を確立する代償として、年代記や經典の影響から自由であることができなかった。形式の点でも、また若干のエピソードの類似からもこのことが指摘できる。

ゲセル物語は、それが単に書写による作品を残しているだけでなく、広い地域にわたつて様々の変異を示しつつ、口承の作品としても豊かな遺産を今日に至るまで伝

えているのである。すなわちモンゴル語圏では、ブリヤート、内・外モンゴル、オイラート(カルマク)に、チベット語圏ではカム、ラダク、アムドに伝わり、さらに LORIMER⁽¹⁾ によってブルシヤスキー語版の存在も報告されている。これを地理的に表現すれば、南はヒマラヤの支脈カラコルム山中のギルギトから、チベットの屋根を経て、北はシベリヤ、バイカル湖畔に至るまで分布していることになる。ブリヤートの口承諸版は、ソビエト期以前から ХАНГАЛОВ⁽²⁾ をはじめ、すぐれた研究家たちの手によって採録されてきたので、変異に富む諸版が利用でき、それらは、土着の神話が外来の物語にいかにか同化吸収されてきたか、または抵抗してきたかをまざまざと示してくれる。

ゲセル物語の存在は Pallas の旅行記によって、はじめてヨーロッパに伝えられたとされている。この旅行記の GAUTHIER 仏訳によれば、WILLIAM COX の言として、すでに、manuscript の存在が知られている⁽³⁾。しかし、これが写本であったどうかは疑わしく、実際には木版本であった可能性が充分にある。

ごく最近まで、モンゴル学が利用しえた唯一のテクス

トは、一八三六年に T. J. SCHMIDT が刊行したものであった。したがって、Poppe や KOZIN などの従来の研究は基本的にはこのシュミット活字版系統のものに限られていたことが示しているように、諸本の比較研究によって、書写版の起源や普及について論ずることは不可能であった。ゲセル物語の研究が新たな装備をそなえて、よみがえりの第一歩をしるすことができたのは、シュミットのテクスト刊行後、一世紀以上をへだてた一九五〇—六〇年代に属する。新たな装備の第一は、中国内蒙古自治区における二種のテクストの出版および PINFEN を主幹とする、モンゴル人民共和国科学委員会によって、オイラート語写本を含む五種の写本が Corpus Scriptorum Mongolorum の Tomus IX⁽⁴⁾ として刊行されたことである。第二は A. И. УЛАНОВ⁽⁵⁾ および ДАМДИНХУРЕН などの劃期的労作の出現である。内モンゴルの二つのテクスト、および GSN のうちの二つは、これらの研究が出版された後にあらわれて、さらに研究の分野をひろげているのである。本稿は、このめぐまれた状況のおとずれによってはじめて可能となった問題設定に、不十分ながらもたちむかった最初の試みである。

(111) ゲセル物語のモンゴル語書写版諸版の相互関係について

- (1) Lorimer, D. L. R. An Oral Version of the Kesar Saga from Hunza (Folk-Lore 42, 1931, 2).
 - (2) ХАНГАЛОВ, М. Н. Собрание сочинения I, II, III Улан-Удэ, 1958—60. 68頁。ハンガロフの著は「民族学研究」第二十五卷第三号に私の紹介がある。
 - (3) Voyages du professeur Pallas, dans plusieurs provinces de l'empire de Russie et dans l'Asie septentrionale; Traduits de l'allemand par le C. Gauthier de la Peyronie, 9 tomes, Paris. 一橋大学附属図書館蔵 Carl Menger 文庫。もんだらの個所は一七七二年四月の記載にこの「第五卷」二五四ページの注である。
 - (4) УЛАНОВ, А. И. К характеристике героического эпоса бурят. Улан-Удэ, 1957.
 - (5) Дамдинсүрэн, Ц. Историические корни гасарнады, Москва, 1957. 以下 ИКГ と略す。
- 二 北京木版本について
- 北京木版本が我が国に所蔵されているかどうか私はまだ確かめることができない。ИКГに添えられた、その第一葉両面の写真によって美しく鮮明な木版であることがわかり、また Heissig の記述により、その要点を知ることができぬ⁽¹⁾。
- (1) *Arban jü-gün ejen gesser qayam-u turgu'i orustida*

の題名をもち

- (2) I—VII 章 (52+5+12+27+69+7+5) を含む
- (3) VII 章 5H に *Engke amuyulang-un tabin tabdayar-un ulagan bešin jil-un gabar*(1) *terigün sara-gün sain edür-tür legüskobei* (康熙五五——一七一六——年の赤・猿年の春のはじめの月——陰曆正月——の良き日に完了した) とある。

次に内蒙古版上冊の、発行者のまえがきによれば、「本書の歴史的性質を保存するために、原本をいささかもなおしたり、あらためたりしなかった。ありのままに移して刊行した」⁽²⁾、また原本については、「北京で木版で刊行された(中略)ゲセル物語の最初の七章」とあって、木版本にもとづいていることが明記してある。各章の量は、Heissig 博士が木版について記しているのと一致し、題名も等しい。奥書き(三二三ページ)は、その記述と二つのわずかな点だけで異っている。すなわち

tabin tabdayar-un (H)

tabin tabdayar on (内蒙)

であり、このちがいは、極めてわずかな字体のちがいにとどくので、読みちがいが起りやすい。次に内蒙古版に

は *qabar-un* の *un* がない。しかし *tabdarar*; *qabar* という口語形の露出した二語は両者で一致する。これ以上追究することはできないけれども、次に述べるノムチ・ハトン版およびオイラート版がともにこの二点に関しては内蒙版上冊に一致することを注意しておきたい。

シュミットのテキストは、おそらく、ポツペも言うように、⁽³⁾ レニングラートにある北京木版本の復刻であり、シュミット本と内蒙上冊本とを部分的に比較した結果からみて、字体の類似による読みちがいのと思われる個所を除いては、同一の原本にもとづいていることはまず疑いない。内蒙版が原本に忠実であると言いながらも、*ジ・ウ* の区別をしているのと、シュミット版が有印であることは全体を貫いている。そのいづれも、読者の便をはかった解釈であらう。私は、内蒙上冊本をひとまず北京木版本と同一視し、その代用として用いながら以下の考察につづる。

(1) Heissig, W. *Die Pekinger lamaistische Block-Drucke*, Wiesbaden, 1954, S. 35.

(2) 中国語の奥附けは「格斯爾的故事(上册)」内蒙古人民出版社、呼和浩特特市一九五六年。

(3) Poppe, N. *Geserica, Asia Major*, 1926, S. 187.

三 内蒙古下冊版とジャムツァラーノ版

ここに言う内蒙古下冊版とは、前述の上冊版の続篇として同時に出版されたもので、刊行者はそのまえがきで、

「十方の主ゲセル・ハーンの物語」という書物の終りの第六章はたえて出版されることがなく、わずかに手書きで弘まっていたのである。この写本で流布していた終りの六つの章を復刻して刊行した。

と述べ、また上冊の予告では、入手したのは北京市内であると語られているだけなので、これ以上のことはわからない。ゲセル物語のⅧ章以下の章名をもつテキストは、この内蒙古下冊版を唯一とし、これのみによつては上冊との関係などについて論ずる手がかりは全くなかったのであるが、一九六〇年ウランバートルで刊行されたジャムツァラーノ版⁽¹⁾によつて、この版は孤立したものでなくなつた。編者の RINTCHEN 教授の前がきの概要から、次のことが知られる。

ツェワン〔すなわちジャムツァラーノ〕博士は一九

(113) ゲセル物語のモンゴル語書写版諸版の相互関係について

一八年にクローン〔すなわち今日のウランバートル〕で一人の内モンゴル人から手に入れ、北京木版本の続編になるように章を整え、クローンの写字生に、木版のゲセルと同様の大きさにして書かせた。その後ロシアから転進して来た白衛軍のパロン・ウンゲルン・フォン・シュテルンベルクの軍隊がクローンを襲って占領した際、パロンの兵がツェワン博士の屋敷を荒らし、このゲセル物語の *barimkar* をとって典籍を庭に捨てた。その後さわぎが治ってから集めてみると、*Tajār tuluna jaydur-tai tenegen ulayn garyn-tai bagidarsan bitig* の一章だけがそっくりなくなっていた。

そして、この章の口誦者をたずね歩いたが、遂に目的を達しなかったと述べている。

この二つの版の文章は驚くほどよく一致する。大部分が逐語的一致を示すので、相互の依存の度合は極めて高く、このような類似が独立に発生しうるものであるとはとうてい考えられない。章名(番号)は必ずしも一貫していない。内蒙下冊版ではⅧ章からはじまってⅦ章で終り、途中、Ⅻ・ⅩⅣ・ⅩⅤ章の名がない。ともかく、まえが

きで述べられているように六つの章ではない。ジャムツァラーノ版はもっと不揃いであって、RINTSCHENの序文にみられるような整理のあとはない。この両版を対照させた結果は次のように一覧できる。

内蒙下	ジャムツァラーノ
	5—8
1—17 VIII)	8—27 VIII)
18—45 IX)	28—61
46—52 X)	61—67 IX)
52—101 XI)	
102—104 XIII)	67—70 (X—
104—190 XIII)	70—159 —X)
191—297	
297—367	160—227 (XII—
367—368	
368—380)	227—238
	238—242 —XII)
381—383	243—245 (XIII—X)
383—463 XVI)	245—325 XI)
463—543 XVII)	325—394
	394—425 (XV)

アラビア数字は各版のページ数、ローマ数字は章名を示す。内蒙下冊の三八〇ページに)とあるのは、ここに大きな区切りがあるが章名はないことを示す。(は冒頭

に、)は末尾に、()はそのいずれにも章名のあることを示す。□は、相手方の記述が対応の所に欠けていることを示す。この一覧は、全体の概観を得るのに適するよう、こまかいちがいは無視してある。例えば、二、三行にわたる脱落もこの表からはうかがえない。

この表から次のことが言える。

- 一、記述の順序は両版ともに同じである。
- 二、内蒙古下冊のXI章約五〇ページがジャムツアラール版にそのまま欠けている。
- 三、内蒙古下冊版の 101—207 百ページあまりがジャムツアラール版にそのまま欠けている。
- 四、ジャムツアラール版では、内蒙下冊版が終ったところからXV章の約三〇ページがつづく。

これらの三点に比べれば、他の違いは量的にも内容的にもとるに足りない。章名のつけ方には食いちがいがあっても、章の区切りが一致していることが多く、上記の三つの異同は機械的である。つまり問題の個所がまとまって脱け落ちたか、或ははまり込んだかのような差異であって、これによって両版の依存関係は極めて直接である可能性が強い。この推測を支持するものに、字

形を別の語に見誤まったと考えられる例がいくつある。

- 1) ᠵᠠᠮᠤᠲᠤᠷᠠᠯᠠᠷ 、ジャムツアラールノ三三五
 ᠵᠠᠮᠤᠲᠤᠷᠠᠯᠠᠷ 、内蒙下四七三
- 2) ᠵᠠᠮᠤᠲᠤᠷᠠᠯᠠᠷ 、ジャムツアラールノ二四五
 ᠵᠠᠮᠤᠲᠤᠷᠠᠯᠠᠷ 、内蒙下三八三

これらはエとの混同した例であるが、ジャムツアラール版の2)のばあい数行おいて、同じ語に ᠵᠠᠮᠤᠲᠤᠷᠠᠯᠠᠷ という内蒙版に似た形を出している。

ジャムツアラールが筆写させた原本の属する一群の、北京木版の統篇ともいふべき写本があり、内蒙下冊版もこれに属していたと推定してもひどく的外れることはないであろう。次に引く [Пчеловский] の言う《南モンゴル版》という語を私ははじめて目にするのだが、ここに提出されている射程の広い設問に答えるには、何よりもまず、文献学的作業によって、私の仮定した統篇写本群の相互関係をつきとめることが必要である。

モンゴル学者たちに《南モンゴル版》の名で知られているこれらの諸章は仏教的觀念が深く滲透しており、イデオロギーの面では、最初の七章すなわち北

京版とは著るしく異っている。この現象の原因を明らかにすることは文芸学者たちの当面の課題である。⁽²⁾

以上簡単にふれた両版の相違点は、オイラト版やノムチ・ハトン版との関係において見るとき、さらに興味深い問題を提示するのである。

(2) Zamcaranov's version of Kesar Saga CSM tomus IX fasc. 3a, 3b, Уланбаатар 1960.

(2) Пучковский Л. С. Собрание монгольских рукописей и кириллицей УЗМБ IX 1954 стр. 122.

四 北京版とノムチ・ハトン版について

ノムチ・ハトン版は ДАМДИНГУЯН の ИКГ においてもまだ利用されていなかったの、CSM に二分冊として加えられてはじめて研究者に知られるようになった。⁽¹⁾ 刊行者 RINTCHEN の序文は次のとおりである。

ノムチ・ハトンのゲセルは、アロ・ハンガイ・アイマクより国立図書館に十年程前に来たものであり、上質のナンギヤト紙〔中国紙を指すか〕に筆で書いてある。典籍の長さは六二・五、幅は一七センチである。

る。文字は極めて筆勢よく書いたハルハ西部のものであり(後略)

この版の前半は北京版とほぼ一致するけれども、後半部の対応を見出すことは非常にむづかしい。この点が、後に述べるその他の特徴とあいまって、この版が独得なものであるとの印象をあたえやすい。しかし私は今までのところ次のような対応を見出すことに成功した。

表中「異」としたところは両版で内容はかならずしもちがわないが、文章の差があることを示した。この比較の単位は、文章の構成要素たる表意単位としての語だからである。たとえば

N. Q. 133—135 (8行) P. 134—135 (7行)

というばあい、それぞれ四六行、七行を除いた個所は一致するが、この四六行が北京版では七行の文章で述べられていることをしめす。今回はジャムツァラーノ版の場合よりやや小刻みに示した。というのは、北京版の IV・V 章にあたるノムチ・ハトン版の部分は、北京版とはかなりちがっているからである。ここで北京版というとき、すべて内蒙古上冊版のことをさして、ページ数も後者で代用させてある。

ノムチ・ハトン版	北 京 版	
2—95 I)	1—93 I)	
95—101 II)	94—100 II)	
101—119 III)	101—120 III)	
120—133	121—134	
133—135 (46行) 異	134—135 (7 行)	
135—136	135	
136—137 (12行) 異	135 (4 行)	
137	135	
137—138 (18行) 異	136 (13行)	
138—162	136—160	
163 (4 行)	<input type="text"/>	
163—174)	160—171 IV)	
174—212	172—207	
212—213 (15行) 異	207—208 (9 行)	
213—216	208—211	
216—220 (52行) 異	211 (3 行)	
220	211—212	
220—221 (4 行) 異	212 (3 行)	
212—221	212—212	
222—224 (38行)	<input type="text"/>	
224—225	213—214	
225—226 (14行)	<input type="text"/>	
226—227	214—215	
227 (3 行)	<input type="text"/>	
227—232	215—219	
232 (2 行) 異	219—220 (5 行)	
232—233	220	
233—236 (44行)	<input type="text"/>	

(117) ゲセル物語のモンゴル語書写版諸版の相互関係について

ノムチ・ハトン版	北 京 版	
236—239	220—223	
239—250 ?	223—230 ?	
250—257	230—236	
257 (2行) 異	<input type="text"/>	
257—259	236—238	
259 (2行) 異	238 (2行)	
259—260	238—239	
260 (2行) 異	239 (4行)	
260	239—240	
260—261 (13行) 異	240—242 (28行)	
261—269	242—249	
269 (3行)	<input type="text"/>	
269—277	249—255	
277—278 (7行)	<input type="text"/>	
278	255—256	
278—279 (4行)	<input type="text"/>	
279—281)	256—258	
281—344 (63ページ)	<input type="text"/>	
344—388)	258—295 V)	
388—393 (81行)	<input type="text"/> 異	{ 内蒙下 <input type="text"/> 5—8
393—408	<input type="text"/>	{ 内蒙下 1—17 VIII) 8—27 VIII)
408—432	<input type="text"/>	{ 内蒙下 18—45 IX) 28—61 IX)
432—437)	<input type="text"/>	{ 内蒙下 46—52 X) 61—67 IX)
437—479)	<input type="text"/>	{ 内蒙下 52—101 XI) <input type="text"/>
479—487 VI)	269—306 VI)	
487—492 VII)	307—313 VII)	
奥 書 き	奥 書 き	
492—500 (111行)	<input type="text"/>	

さて、前の表に見られる特に著しい特徴点をあげて、問題の出発点とさせたい。まずノムチ・ハトン版は、北京版の全体をおおう上に、北京版には全く欠けている文章を含んでいる。とりわけ次の個所が量的に大きい。

ノムチ・ハトン版の

- (1) 222—224 の三八行
- (2) 281—344 の六三ページ
- (3) 388—393 の八一頁
- (4) 393—479 の八六ページ
- (5) 492—500 の一一一行

(2) の六三ページというのは、優に一つの章を成して余りある量であって、この部分は、シャライゴル三王の、白帳汗の息子の嫁さがし——一種の求婚譚に関するものであるが、このような形では北京版には発見されない。この個所は内容的によくまとまって独立性が強いので、北京版以外の何かの版と関係をもつものと想像される。

次に(4)の八六ページは、上の表から明らかなように、北京版にはそっくり欠けている。北京版の側にたってみると、そのV章とVI章との間にノムチ・ハトン版は

九一ページ(すなわち(3)と(4))をはさんでいることになる。この部分のはじめの八一頁は一種の祈願文であって、頭韻をふんでいる。残りの問題の八六ページの大部分が内蒙下冊の一〇一ページにあたり、ジャムツアラノ版はその約半量を八七ページに含んでいるのである。すなわち、ジャムツアラノ版は、内蒙下冊のページ数になおせば、一〇一—一〇一ページのうち、五二—一〇一ページを欠くのである。この個所につづいては、ノムチ・ハトン版は北京版と同様の順を追って書かれ、VI・VII章についてはその章名にいたるまで一致する。ノムチ・ハトン版は北京版の終りであるところにつづいて一一一行の文章をもつ。

最後の八ページ、一一一行の不用意なとり扱いは、この版のまちがった解釈に導くおそれがある。たとえば刊行者の RINGCHEN 教授は次のように述べている。

ゲセルのこの物語を、オルドス・トゥメンのポシヨクト・ジノンの妃で、一六一四年にダラ・ボデイサトワ・ノムチ・ダライ・セチエン・ジュンギン・ハトンの称号をもつに至ったタイガル・ハトンがおぼえて訳したので、十七世紀の初めに訳したことは明

らからである。

(一) 十七世紀のはじめに、(二) (チベット語から) 訳したという、この重大な断定は、いささか吟味を要する。この二つの断定がそのまま受け入れられるならば、モンゴルにおけるゲセル物語の起源、少なくとも書かれたゲセル物語については、その探索のはんいは著るしく限定されてくる。なおまた年代記研究の上に、新しい問題設定が必要となるだけでなく、モンゴル文献史研究に新たな課題がつけつけられることとなるのである。H. B. H. 教授も、この一節を注目すべきものとして、しばしば言及された。ともかく、この奥書きの一節は重要な資料である。

オム・マニ・パドメ・フン。Siri nigülesküi の化身
ダライ・ラマ、万物の主ゲセル・ハーンの両者が合
して、あらゆる六種の全有情を済度する方法を大い
に慈悲あつくして著したこの経典(sudur)を信仰あ
ついでノムチ・ハトンが帰依して憶えたので、ソマテ
イ・リテイのトイン、ボクボン・エルデニ・チョル
ジ〔が〕、智慧大いなるツォンカパの膝裏に依拠して
訳した。ゲンデン・グーシ・ラマが文字に写した。

根源の尊きラマらの至福あれ、イダム・マンダルの
仏の至福あれ、信ずる法の守護者らの至福あれ、
よき慈善(德行)の積まれんことを、年寿のいやま
さんことを(五〇〇ページ)。

この文によってノムチ・ハトン版は閉じられるのである
が、いまま少しさかのぼつて、本文とこの奥書きとの関係
をしらべよう。

上の表に記しておいたように、ゲセル物語のVII章は四
九二ページで終り、この章の結びの句は北京版と全く同
じである。

*arban jügün arban goore-jin ündüsün-gi tasulγan
actü boyda geser mergen garan qanγu daγisun-i dornu-
tayγuγu qanγu amian-i jiyγayγuγan dolubγar bitüg.*

十方の十害の根を断つた慈悲あるボグダ・ゲセル・
メルゲン・ハーンがあらゆる敵を降して、あらゆる
有情を楽しませた第七章。

北京版では次に、さらに *nanγghala* と書いた一行があ
るといわずかなちがいを除けば、北京版と同様の日付
「康熙五五年」の奥書きが直接これにつづく。ただし北
京版で口語形に近い表記であった *tabdayar, bičün, qubar*

をそれぞれ、*tabudatyan*, *bevin*, *gabur* と、伝統的文語の正書法になおして記載している。

北京版はこれで全部終るのであるが、ノムチ・ハトン版はさらに次の行に

blama erdemu geser qayun qogjar jolyalqaysan sudur orashai.

ラマ・エルデニとゲセル・ハーン両者様まみえし経とあって、*oni qayan* の鉄・虎の年に、「*sarayiqur* の一月の三つの新月の日の夕方」ゲセルが天降り、二人してことばを交した次第が述べてある。この経につづいて上掲のノムチ・ハトンの奥書きがある。結論から言えば、問題の奥書きは、この *sudur* のみに関するものであると私は考えている。

さてⅦ章末の康熙五五(一七一六)年という北京版と同様の奥書きは、ノムチ・ハトン版が北京版と直接の関係をもつことを明示している。この「康熙五五年」を従来の暗黙の通説に従って木版本の刊行年度を示すものとすれば、ノムチ・ハトン版の少なくともこの部分は北京木版本からの写しであると考えねばならなくなる。そうであるとするれば RINTCHEN 教授のように、一六一四年の翻

訳とすることはできない。またかりに、このような場合はおそらくめつたになかるうが、ノムチ・ハトン版或はそれに近い版によって木版が作られ、その際木版が、ノムチ・ハトン版或はそれに近い版のこの箇所をそのまま踏襲したとすればなおのこと、ノムチ・ハトン版の成立を一六一四年まで上げることはできなくなる。

以上の点から、当然の帰結として、私はこの版の成立年代を北京版以降に下げなければならぬと考える。

さらに「訳した」という表現をどう解釈すべきであるかが問題となる。上の考察から、少なくともかなりの部分が北京版に依存し、またある部分は、すでに写本によって知られている版にあることが明らかとなったので、この版全体を、例えばチベット語などの他の言語のテキストから訳したというふうには理解しえない。そこで私は「訳した」のは、この版の特定の一部のみを指しているものと考ええる。

ノムチ・ハトン版において全体の大部分を占めるゲセル物語は、「康熙五五年……」の奥書きを以て完結し、次に

blama erdemu geser qayun qogjar jolyalqaysan sudur oru-

sibai.

という独立の一篇が附され、したがってこの版は二篇を含むものと解釈する。最後のノムチ・ハトンの奥書きの「この經典を……訳した(ene sudur-i……orǰiyubai)」の「ene sudur」とは、すなわちこの附篇とも言える短い一篇を指しているものと考えたい。この考えを支持するのは、巻頭にあるこのゲセル物語の表題は「arban jig-tin ejen geser geyan-u turju-i oruṣibai」とあり、ゲセル物語は「turju-i」であって、「sudur」ではないという点である。

ノムチ・ハトンのゲセル物語の内容は、すでにみてきたように結局のところ北京版、ジャムツァラーノ版、内蒙下冊版など、および今のところつきとめることのできない或るゲセル物語の版によって全体がおおわれる。三八一―三四四の、他のテキストに未知の、シャライゴール王子の求婚譚は、一九六二年出版のアムド版ゲセルの中国語訳「格薩尔4」の中に、かなりよく似た形で出てくる。もし、ノムチ・ハトン版が何らかの形でこのようなアムド版を利用したとすれば、「訳した」のはこの個所をも指しうるわけである。

ノムチ・ハトン版が、北京版と一致する部分には、い

くらか文体的ちがいもある。一般的に言って、後者はしばしば極めて簡潔な書き方であるため、主語や状況語を省くことが多いが、ノムチ・ハトン版ではそれらが加わって一層説明的である。またIV・V章の両版の随所に指摘されるずれば、一方から一方への直接的かつ単純な借用によっては説明しつくされないものであって、北京版以前にあったと仮定しうるかもしれないテキストを介して明快な答えが得られるであらう。ノムチ・ハトン版は、北京版や内蒙古下冊版の知識を前提して眺めるとき、それが依存する資料は均一でないという印象が強い。

(1) Nonxi gatun's version of Kesar saga CSM tomus IX fasc. 4, 4a Yranhotarap 1960

五 オイラート版ゲセル

CSMの一冊として、一九六〇年ウランバートルで刊行されたものが、⁽¹⁾我われの手にしうる唯一のものである。このテキストに RINTOGEN 教授が寄せた前書きによれば

ウブサ、コプト両アイマクの牧人らの間に、オイラ

ト文字の手書きのゲセルがあるという情報があったので、それをたずねているうちに、我が国立図書館に何章かが入った。そのあふものは Дархан Дархан-хан の図書館にあった数章で、そのあるものは読書人の古老たちがめいめいの書庫にもっていた章である。またある章は Харин Бэц Аюузан から得た。ただし図書館にどの章があり、誰から来たものかを記録していないので、今となってはどの章がどこで誰から来たのか明らかとするよりどころがない。記憶をたどって、以前の所有者の名の、あるものをあげたにすぎない。このたび七章のオイラト文字版ゲセルを公刊して、諸学者の便に資す。

これらの数章がウブサ、コプトなどの西ハルハのオイラトから出たことはとにかく明らかである。ヨーロッパやソ連邦のオイラト版ゲセルがどこから出たものか明らかにする方法はないが、もしボルガ・カラムクから出たものであるとすれば、オイラト諸版の成立年代と流通経路を明らかにする上で有力な鍵となるだろう。OSMのオイラト語テキストの内容と特徴は次の表によって概観できる。

オイラト版	北京版	
5—72 I)	1—93 I)	
72—77 (II)	94—100 II)	
77—92 III)	101—120 III)	
93—131 (IV)	121—171 IV)	
132—134 (44行)		
134—146)		{ 内蒙下 1—17 VIII) Z 8—27 VIII) { 内蒙下 18—45 IX) Z 28—61 IX) { 内蒙下 46—52 X) Z 61—67 IX)
146—166)		
166—170)		
170—175 VII)	307—313 VII)	

まず、オイラト版五—一三二ページは北京版と完全に一致している。章の分ちかたも I—IV 章までで同じよ

うに区分してある。ノムチ・ハトン版のIV・V章が北京版と比べて種々の出入りをもっていたことを考えあわせれば、オイラート版の北京版との距離はゼロに近い。

一三四—一七〇ページの間には、章数は一度も記されていないが、一四六ページの終りに、普通、章を改めるのに用いられる大きな区切りのしるしがある。次に一七〇ページのこの部分の末尾には *ene inü tabu zuruyduyar bitüle zamkü metü* (これは、第V・VI章をひとまとめにしたものようである)と、()内に、本文と同様のオイラート語による注記がある。この一文は原本にあったものか、編集者が加えたものか、まだ明らかにしていないけれども、それはともかく、この部分は北京版には全く無いものであって、内蒙下冊版のVIII・IX・X章そのまま、ページ数にして一五二そのものである。したがってこれは同様にジャムツァラーノ版八—六七ページにそのまま一致するのである。そして、先に述べた一四六ページの切章記号のある場所は、そのまま内蒙下冊のVIII章の末尾と一致している。

一七〇—一七五ページは末尾にVIII章と明記されているように、これは再び北京版にたちもどり、そのVII章と完

全に一致する。これらの点を大ざっぱにまとめていうと、オイラート版の実質は、その北京版で言うV・VI章の部分に内蒙下冊版が代入して、前後は北京版と同様の構成によってはさまれていることになる。

オイラート諸版の文章は、北京版のモンゴル語を一つ一つオイラート語に移植したと言えるほど一致していて、これは、オイラート語への「翻訳」という以上に北京版に近いものである。VII章の末尾に「康熙五五年……」の奥書きがある。北京版の *terügin saru-gin* の次にある個所に *sinugin* の一語が余計にある点を除いては、全く同じである。

その他のオイラート語写本については、*Poppe* が *Ms. V₂, V₃* (レンニングラート・アジア博物館)を、*Ламинсүрэн* が、ソ連邦科学アカデミア東洋学研究所の八つを挙げているが、*ダ氏*によればそのうちの四つは明らかに北京版からの翻訳だということである。*ダ氏*の調査をまとめると、ソ連邦のオイラート写本は

(一) 北京版の全部或はそのうちの前半の数章からなるもの

(二) VIII・IX、ばあいによってはX章を含む、これら

内蒙古下冊およびジャムツァラーノ版の最初の部分を含むもの、

の二つの系列に分けることができる。

ドイツの写本は Herzig の記述によって明らかであるが、注目すべきは Msc. Dresd. Eb. 405 a-1. LB. Dresden の表紙には、*Legende vom Lama Erdemi und Geser Chan* との記入があり、*Kalmük, Manuscr. No. 37.* と古い番号がある。⁽²⁾ この題名は、ノムチ・ハトン版巻末の *blama erdemi geser qayan goyar joljakaysan sudur orusibai* のドイツ語訳名であると思われる。そうであるならば、この *sudur* あるうは *Legende* は独立してオイラート語版も成立させていることになり、ノムチ・ハトン版について述べておいて私の見解は、これによって新たに根拠を増すこととなる。

(1) *Version oitrate des chansons de gesser CSM Tomus IX fasc. 1, Uvangaarap 1960.*

(2) Herzig, W. Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland Bd. I.

六 ザヤのゲセル

CSM におさめられたこの版は Дамлингерн 氏によれば一九三〇年代にツェツェルリク市のザヤ・パンディタの書庫で発見され、この版の通称もこれに由来する。この書庫は一七世紀にトド(オイラート)文字を考案したのでよく知られている Zaya Pandita Luhsangperingjai の屋敷にあって、代々の化身ラマ(活仏)によって管理されてきたので貴重な典籍を擁している。

ザヤ版の全体は十八の章に分れ、巻末には *geser-ibai bang orusibai* という一篇が付属している。おそらく民間信仰に入ったゲセルをまつるときに誦された一文であろう。同様の題名の作品がモンゴル語でもオイラート語でもかなり残っていて、Herzig はその木版の存在を報告している。

Дамлингерн 氏は、はじめの一五章は北京版にほぼ一致するが、終りの三章は北京版には無いと述べ、この三章と他の版との関係に説き及ぶには至らなかった。今日、私は内蒙古下冊、ジャムツァラーノ版等を利用できるので、これら三章を他の版について比較した結果を次のように整理することができた。

ノムチ・ハトン版にも対応の箇所があり、ここに記す

(12.) ゲセル物語のモンゴル語書写版諸版の相互関係について

べきであるが、他の版を介して知られるので、ここには

ザ ヤ 版	北 京 版	内 蒙 下 冊	ジャムツァ ラーノ版
341—376 XIII)	258—295 V)		
376—385 XIV)	296—306 VI)		
385—391 XV)	307—312 VII)		
391—419			28—61
419—423 XVI)	末尾 2 ページ程 は異なる	② [18—45 IX)	61—67 IX)
424—427		[46—52	5—8
427—445 XVII)		① [[]	9—27 VIII)
445—447		[1—17 VIII)	67—69
447—549 XVIII)		③ [102—104 XIII)	69—159
549—556 <i>geser-ün bsang orusibai</i>		[104—190 XIII)	

併記しなかった。

ザヤ版 I—XII、北京版 I—IV 章までは、このように単純化して表示することはできない。述べられている内容はほとんど同じであるが、用いられている語や文体などの形式面では全く異なっている。したがってこの部分については、両版が具体的にテキストの面で直接に関係をもっているとは考えられない。ザヤ版が北京版に倍する章をもっているのは、このような文体のちがいなどによつて、章の分け方が細かくなっているためである。

ザヤ版 XIII・XIV・XV はそれぞれ北京版の V・VI・VII に対応し、大綱においては文章も一致する。しかし種々の無視できない出入りがあるので、この部分の詳しい比較は、ザヤ版そのものの性質、および北京版、ノムチ・ハトン版などとの関係を知る上に重要であろうと思われる。VII 章終りに「康熙五五年……」の奥書きをもつ北京版、ノムチ・ハトン版にたいして、ザヤ版にそれが無いのは、この版の大きな特徴で、章の分け方にも一貫性が見えることと関係がありそうだ。

北京版にはない、ザヤ版の XVII 章以下はすべてジャムツァラーノ版に含まれている。注意すべきは、ジャムツァ

ラーノ版が、冒頭にまずそれを以てはじまり、ノムチ・ハトン版がいくらか長いかたちでそれを含み、かつ内蒙古下冊版には欠けている韻文の部分が、ザヤ版にそのまの形で存在し、しかもジャムツァラーノ版、ノムチ・ハトン版両者と同じ内容の章の直前という同じ位置におかれている点である。紙面の制約で、ここに引くことはできないが、そこには、この種のモンゴルの韻文の基本的な技巧が極めて素朴なかたちで現われている。

ところで、ザヤ版(c)とジャムツァラーノ版(乙)のこの部分を対照させてみると、語形の類似のために起きたと思われる差異がある。

乙	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ
ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ
ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ
ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ	ᠠᠨᠢᠨᠠᠨᠠᠨ

このような例は、両版が直接にはないにせよ、一方が一方を写しとったという関係が、両版の写本をさかのぼって行くと探られるのではないかと思わせる。

さて、上に指摘した部分が、ジャムツァラーノ版、ザ

ヤ版、ノムチ・ハトン版が共有していて、内蒙下冊に欠けている一つの特徴である。

次にノムチ・ハトン、内蒙下冊が共有するところの、後者のページ数でいえば五二一〇一ページがザヤ版に欠けていて、この点でもジャムツァラーノ版と一致している。上述の韻文も、ノムチ・ハトン版が、このザヤ、ジャムツァラーノ版の二つとはいくらか異っていることも考慮に入れると、この二つの点に関するかぎり、ジャムツァラーノ版とザヤ版は深い関係にあることが知られる。

しかし上の表で②①③の記号で示しておいたように、叙述の順序は、ザヤ版独得のものであって、他のすべての版と対立している。

Дамжинсүрэн は北京版とザヤ版の XV 章までの内容は同じであるが文章にはひらきがあるという点を解釈して、「北京版は、内容的にはザヤ版に大変近いので、ザヤ版の改作であろうと考えられる。と同時に、両版のものには、ある共通の拠りどころがあることは明らかである」(ИКТ стр. 63)と述べている。この二つの版がともにさかのぼるような版を仮定するとすれば、その版はま

た同時に、北京版にない個所をもった諸版の問題の個所を含むような版である可能性もはないのである。

しかし見方をかえれば、他の諸版が章の一貫性に欠け、その長短もひどくばらばらなのに反して、ザヤ版のそれは極めて整ったかたちをとっている。それが却って後代の意識的な整理の跡を思わせる点である。

(一) *Cay-a version of Kesar saga CSM tomus, IX fasc. 2, 2a Yrandaarap 1960*

七 むすびに代えて

書かれたゲセル物語の各版の検討はこれで終る。*Cain-ing Senen-i namlar oruſiba* は Дамдинсүрэн により、すでにくわしい研究がなされた。氏の見解によれば、この版は十九世紀にチベット語原典から訳されたものであって、私の今回の課題に直接の関係はないので、ここではとりあげなかった。

以上の比較から、最も注目すべき点をくり返して強調すれば次のようになる。

(一) 北京木版本の「康熙五五年……」の奥書きは、ノムチ・ハトン版、オイラート版のいずれにも見られ

る。またこの両版の叙述の順序は同じであって、北京木版本のV—VII章の間に、内蒙下冊版のVIII・IX・X章をもつ。

(二) 内蒙下冊版でいえばそのVIII・IX・X章は最も分布が広く、ジャムツァラーノ、ノムチ・ハトン、オイラート、ザヤの各版、つまり北京木版本以外のあらゆる版に共有されている。

(三) ノムチ・ハトン版のみが内蒙下冊版のXI章をもっている。

これらの点をあげても、断定的なことは何一つ言えなけれども、北京木版本の影響力が極めて強く、それが、書かれたゲセル物語の普及に大きな役割を果たしたことが察せられる。七つの章からなる北京木版本のわく組みは強力であって、途中で他の章が加わることがあっても、本来の七つの章の前後関係そのものは変ることなく、また第VII章を以て終る。このような、堅い七つの章のわく組みの中に、下冊版系のVIII・IX・X章がいかに入力したかという間に答えることが、木版系と下冊本系の関係を解くかぎになり得るだろう。これらの版の編者は、VII章に続く章であるという意識を全く持っていないかった

ことは明らかである。それに反し、Ⅷ章に下冊版系のⅧ・Ⅸ・Ⅹ章が続くという知識をあらかじめ持っていたかと思わせるザヤ版の配列は、この版が、より新しい時代により多くの版を参考にしつつ編まれたと思えるのである。したがって ДАМИНСКИЙ 氏のようにザヤ版を北京版に同等の資格で対立させて、共通にさかのぼる原本を想定するにはまだ根拠が充分ではないと考えられるのである。

八 あとがき

本稿で試みられた諸版の比較は決して結論的なものではなく、今後に行われるべき、より精密な研究へのみちしるべである。しかし、詳細は必ずしも精密を意味しない。こう言わねばならない理由の一つは、資料の持つ外的制約である。利用しうるテキストのほとんどが手書きによるリトグラフ様のもので、一部は活字版である。前者のばあい写し手の不注意による脱行が少なくないことは、それらの正誤表の多数の例からわかる。殊に各行のはじまりがたまたま頭韻をふんでいたり、同一の語ではじまっているばあい、飛ばし写しが起りやすい。写真複

写が得られない今日、微細な点にまでわたる校本作製が無条件に有効であるとはなしたがたい。さらに本質的には原本そのものの性質がもんだいとなる。有効数字の眼界をどこまであげるかという基準は、原本の性質と、校本作製の目的によってきまるのであり、したがって単純な機械的作業にとどまらず、ある程度の解釈を排除しえないばあいがある。

本稿の試みはいわばおまかな分析であり、単語の内的形態をこえて、文の単位としての単語にもとづく文体的比較により、諸本の依存関係を明らかにするための第一段階での作業である。ここで得られた結果は、さらに細目にわたる、こまかい分析を経てふたたび整理され、おまかな分析に還らねばならない。このようにして得られる諸版の依存関係を、時間的前後関係を含めて、一目で理解できるような記述は、資料であると同時に、また relevant な要素のみを網羅した、分析の結果を示すものとなる。

以上は、筆者が一橋大学大学院博士課程単位修得論文として提出したものの一部分であり、多くの部分、とり

(129) ゲセル物語のモンゴル語書写版諸版の相互関係について

わけ口承のゲセルについては割愛せざるをえなかった。ブリヤートの B. Kim Chinghor 氏から筆者に送られてきた資料によれば、この方面の研究はいよいよ盛んに進められるようである。

一九六二年夏、来日されたボン大学の WALTER HEI-

SSIG 教授と、一夜、時を忘れてゲセル写本について語りあう機会があり、教授の熱心なはげましのことばが筆者を力づけた。このささやかな一篇には教授への心からなる感謝の念がこめられている。

(1963, IV, 22.) (東京外国語大学講師)